インドの経済発展

塚本洋海

まず始めに
1. 政治的要因
2. インドの農業
3. インドの工業
4. インドの宗教
考　察

まず始めに

インド経済は近年急成長をしている事は色々なメディアに取り上げられる。その成長は同時期に成長を始めた中国とあわせ“Chindia”と呼ばれる。他にも経済発展の著しい国の頭文字をとって“BRICS”(ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ)とも呼ばれる。このように世界中から注目を集めるインドの経済の発展について触れていく。

1. 政治的要因

インドという国は経済の自由化が起こる前はより多くの国民に利益を分け与えるという理念の下、多宗教、多民族、多言語を抱える多様性を持つ国民に配慮し、社会主義政策をとっていた。インド国内の経済や産業を成長させるために閉鎖的、規制的な経済政策をとっていたが、1965 年の第 2 次印パ戦争や干ばつの影響により農業が思ったように成長せず経済政策を立案する政府の重要性が増し、結果的に他の社会主義国と同様の産業の国営化、規制強化につながる事となった。さらに官僚の権限増大による政官財の癒着により、経

済、産業の発展を阻害していた。

上記に述べた要因が重なり外貨準備高が減少し、1991 年にインドは債務不履行寸前までいったが、ここでラオ政権が立案する「新経済政策」に移行しこれまでの社会主義的な経済政策から、自由な経済政策へとシフトしていった。「新経済政策」になり資本の自由化、各種の規制緩和、貿易と為替の自由化、公営企業の民営化、金融制度の改革が行われた。その結果インドが海外との経済活動を行いやすくなり、公営企業が独占していた産業への民間企業の参入、外国企業の出資制限の融和による海外資本の導入といった要因が重なりインド経済は発展し成長をし始めることになる。

2. インドの農業

インドは農業をはじめとする第 1 次産業は世界でも有数の規模を誇り、主な農作物としてあげれば、米、小麦、卵、綿花、カシューナッツ、マンゴー、サトウキビ、ココナッツ、茶、生姜、ウコンと胡椒、ジュート、砂糖、落花生などを生産している。インド国内の労働力の 60%が農業関係の仕事に携わっている。

植物育種や灌漑設備の整備、農薬の普及などの方法を用いて穀物の大量増産に成功し、2011 年時点で 12 億人いるインドの人口[1]の食料自給率は 100%を超え自給自足可能[2]となった。インドの GDP において農業は数字上では小さな比率になるが、インドの経済発展を支える根幹となる部分である。

---

[1] 日印協会「インドの人口は 12 億人」〈http://www.japan-india.com/news/view/80〉(2014 年 3 月 1 日現在のデータに基づく) 2014 年 11 月 2 日最終アクセス。

[2] 水岡ゼミ「緑の革命」〈http://econgeog.misc.hitu.ac.jp/excursion/00bengal/column/hyv.html〉2014 年 11 月 2 日最終アクセス。

3．インドの工業

インドの工業は世界第 14 位の規模で、国内の GDP の 27%を占め労働力の 17%が工業に関わりを持つ。インドの近年の成長は工業の中の IT 部門によるところも多く、インドの IT 関係の仕事はアメリカからの仕事が多くアメリカのシリコンバレーからの発注を多く受けている。アメリカがわざわざインドに IT の仕事を多く頼む理由としてはインドの抱え込む多大な低賃金で雇える労働力、「0」を発見したという元々の数理的な民族性、毎年輩出される有能な情報技術者達、ちょうどアメリカの裏側に位置するという地理的な位置、といった要素から IT 関係が強いと考えられる。

4．インドの宗教

インドという国には多数の宗教があり人々に与える影響も無視できない。インドが経済発展を成し遂げてきたのはインドの宗教によって形成されてきた国民の意識も大いに関係してくるだろう。

そこで宗教人口が人口の 80%を占めるヒンドゥー教について調べてみる。

ヒンドゥー教はバラモン教から聖典やカースト制度を引き継ぎ、土着の神々や崇拝様式を吸収しながら徐々に形成されてきた多神教である。神々への信仰と同時に輪廻や解脱などの独特な概念を持ち、四住期に代表される生活様式、身分、職業までを含んだカースト制を特徴とする宗教である。なぜインドの経済発展において宗教が関係してくるかというと、先ほど述べたヒンドゥー教における輪廻、解脱、身分、カースト制度などの制度がインドの経済の安定性を高めているのだと思われる。輪廻というのは人が何度も転生し、動物を含めた生類に生まれ変わることを意味する。次に解説は、仏教においては、煩悩による緊縛から解き放たれてこの世のすべての執着から離れ、悟りを開くという意味である。次に一番重要でありイン

ド特有の特徴であるカースト制度について記述していく。ヒンドゥー教の教えであるカースト制度というのは、簡単にいうと生まれによって身分と職業は決まるというもので、生まれた後には身分を上げることはできない。よって現在の人生の結果によって、次の人生の身分を上げる努力をせよ、といった制度である。現在の自分の立場や境遇は自分の前世が悪いことをしてしまったのだから仕方ないという、今の自分の立場の諦観、現世での行いが来世に影響するという恐れが結果としてインド経済の安定につながっているのではないかと思われる。例としてあげるなら中国の労働紛争は 60 万件(2010 年度)[3]近くあるのに対し、インド国内で起こった労働紛争の数は 262 件(2010 年度)[4][5]と非常に少ない。これはチャイナリスクという言葉があるように質のいい労働者がいて、賃金が安く済む上、暴動の心配も少ない国を確保するのは非常に難しく、どの海外企業からみても魅力的でわかりやすい利点でもある。その条件を満たすインドの安定性の根幹にはヒンドゥー教の制度であるカースト制度

---

[3] 厚生労働省「各国にみる労働施策の概要と最近の動向(中国)」(2012 年 10 月 11 日)〈http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/12/pdf/teirei/t225-230.pdf#search='%E5%90%84%E5%9B%BD%E3%81%AB%E3%81%BF%E3%82%8B%E5%8A%B4%E5%83%8D%E6%96%BD%E7%AD%96%E3%81%AE%E6%A6%82%E8%A6%81%E3%81%A8%E6%9C%80%E8%BF%91%E3%81%AE%E5%8B%95%E5%90%91%28%E4%B8%AD%E5%9B%BD%29'〉2014 年 12 月 31 日最終アクセス。

[4] 国際協力本部「インドの最近の経済事情を聞く」『週刊　経団連タイムズ』〈http://www.keidanren.or.jp/journal/times/2012/1011_08.html〉。

[5] 木曽順子「インド労働事情－労働市場の変化と労働運動－」労働調査 517 号 (2013 年) 24 頁。なお web 版は以下の URL より取得できる。〈http://www.rochokyo.gr.jp/articles/13031.pdf#search='%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E5%8A%B4%E5%83%8D%E4%BA%8B%E6%83%85%EF%BC%8D%E5%8A%B4%E5%83%8D%E5%B8%82%E5%A0%B4%E3%81%AE%E5%A4%89%E5%8C%96%E3%81%A8%E5%8A%B4%E5%83%8D%E9%81%8B%E5%8B%95%EF%BC%8D'〉

が深く関わっている。

考　察

本稿ではインドの経済発展の背景・要因を様々な角度から概観したのだが、調査していく上で経済発展の根幹を担っているのはインドの宗教だったことが判明した。なぜなら明確なライバルとして中国を想定したとき、安い賃金と豊富な人口で勝負をすると勝ち目がないわけではないが、どんぐりの背比べみたいにお互いのいい所がかぶり、食い扶持を潰しあうみたいな泥仕合が予想される。しかしインドには強力な武器である国民の安定性があり人口＋賃金＋リスクの少なさで中国との明確な差をつけて近年の経済成長を見せていた。

今後の検討課題としては経済発展の法則性とその例外なども検討してみたい。